

浄土

1987-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
昭和六十一年十二月二十五日印刷 昭和六十二年一月一日発行
第五十三卷 正月号



春



一月の秀句

初空の雲静かなり東山

高浜 虚子

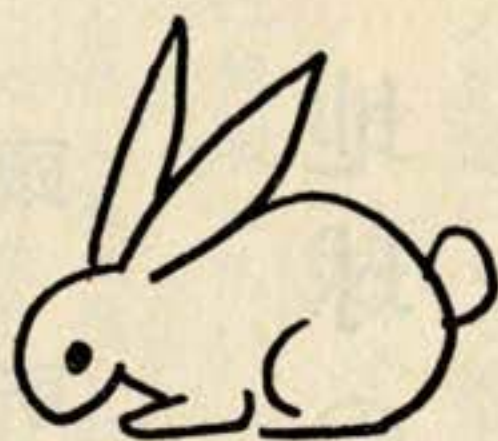
旧年を坐りかへたる机かな

志田 素琴

風上に白鳥あそび年立てり

宮津 昭彦

正月号



此の願をなすをば名づけて正観とし、若し他観するをば、名づけて邪観とす。

——『観無量寿経』真身観文

目次

年頭所感

地球の神秘と如来の願力……………稲岡覚順……(2)

エッセイ

春想二題……………竹中信常……(8)

卯年史談……………細田隆善……(14)

〈特別寄稿〉

『浄土』誌と啄木研究のこと……………須藤隆仙……(20)

み仏とともに =22=

——父の念仏信仰とその挫折(1)——……………安居香山…(26)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第31回

才子変身

……………寺内大吉……(31)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「寒牡丹」 松浦春子画

年頭所感

地球の神秘と如来の願力



一、地球の神秘

私共の棲家である地球は、何と不思議の世界であいう。

大本山金戒光明寺法主

稲岡覚順

私はこの地球を「完全大調和の生命世界」と呼んでいる。

日月星辰、春夏秋冬の運行に寸分の狂いもない。森羅万象はそれぞれ処を得て、互いに

もちつもたれつの共生世界である。一木一草にも無駄はなく、完全調和の大緑地の世界である。

ここ、黒谷山頂の朝はまことにすがすがしい。巨松が巨体を風にゆすぶらせている。空のかなたには小鳥の群れが飛び交っている。脚下では小蟻が既に営みを始めている。まさに、山は生きている。至る処に生命の躍動がある。

同様に地球も生きている。大生命の世界である。その上人類の生息がある。高度の文化の社会を形成している。

何という不思議にして神秘にみちた世界であらう。

二、宇宙は無限に広い

夜空にまたたく星は悉く銀河系の星だ。太陽系の星はこの銀河系のほんの片隅に存在し

ているのだ。

われ等の銀河系の中には太陽系の外に、太陽と同様の恒星が二千億もあり、それぞれ島宇宙を構成している。

銀河系の彼方には更に一千億の島宇宙があると言う。

この様に宇宙は無限であるが、この無限の中に、生命のある星は、目下の処、地球を置いて見当たらない。

天文学者はこの広大な宇宙の中には、生命を持ち、文化を持つ星はおよそ三十億ほどであると推定して、その探査研究に必死ではあるが、未だに一箇の生命星をもさぐりあてていない。

三、太陽系の惑星の一瞥

月（月は地球のただ一つの衛星である）には古来、兎が餅つきをしているとの大きな夢があ

った。

ところが、科学探索の結果は月に対するロマンは破れて、月は索漠たる岩石の塊であつて、そこには生命の一かけらも存在しないことが判つた。

火星、夜空にひとときわ輝く赤い星も、太陽系の中で夢を含んだまことに魅力的な星である。

この星にも古来火星人の存在が信じられていた。イギリスの科学小説家H・G・ウェルズはタコの足のような奇妙な火星人を想像したが、科学者の心なき探検の結果、ここにも今日の段階では一かけらの生命も認められないとの結論になりそうである。

水星は天文学的法則によつて、一面を太陽の方に向け、太陽の完全な一回転によつて一回だけ自転する。従つて水星の半面は熔鉱炉のような熱風であるが、他の半面は氷結し

た寒冷の状態である。従つて生命は存在しない。

金星は濃い水蒸気が大気となつて覆つていて、という一つの神秘がある。ここにも如何なる生命も棲息が許されない。

木星、土星、その他の惑星は太陽から遠く且つ非常に低温であるから、生命存在の望みは全くない。

そうなれば、わが地球以外には如何なる遊星にも、如何なる形態の生命も存在しないということになる。

従つて最初にして最後の人類の住家となつたのは、この地球のみである。

無数の星の中、ほんの一握りの小さい星、地球にのみ人間が生きてゐるのである。

地球は五十億年或いはそれ以上と言われる長い歳月の間に、数知れぬ変転や淘汰を経過して、植物、動物の存在に適當の場所となつ

た。そして人類が最上の傑作であつたのである。

こう見て来るとこの地上の一草一木にも、一匹の小虫の蠢動にも、無限の神秘を感じ生命の不思議に限りない尊厳と愛着を覚えずにはおられない。

四、地球成生の過程

一体この地球の神秘は何時から始まつたのであろう。その生成の過程はどうであつたろう。

宇宙の空間には無数の「ちり」が浮遊している。

この「ちり」は他の「ちり」を吸収し続け、次第に大きくなり、自らの重力により収縮を始め、角かどがとれて円くなり、冷却して新しい星が生まれる。

地球も亦この生成過程を経て誕生したものの

である。

日本の古典「古事記」には、

国くに稚わかく浮うき脂あぶらの如く、くらげなすただよへる時に、葦あし版かひの如く萌もえ騰あがる物によりてなりませる

と表現しているのも面白い。

大空こうかいに洪海こんかい現われ、紺碧こんぺき重疊じゅうじやうして山陸さんりく出で草木そうぼく滋繁じはんして有情うじやう生ず（「共生読本」）

これは仏教の宇宙創成に関する考え方である。

即ち大空輪だいくうりんが転じて風輪ふうりんとなり、火輪かりんとなり、大水輪だいすいりんとなり、大水輪の波打っている間に山陸さんりくが固まり、そこへ草木ができ、生物が現われ、その最高の発現が人間の生活となつ

春想二題



竹^{たけ}中^{なか}信^{しん}常^{じょう}

(佛敎大學敎授・文博
淨土宗敎學院研究所長)

一

元旦の午後、ドサツと年賀状の束が配達される。屠蘇気分で、一枚一枚手にとって、そ

の名前を見てはその人を思い起こし、その文句を読んでは、その人の近況を知る。年々歳々、年賀状の数が年齢に比例してふえるのも、それだけ此世に長くいられた証拠かとも思う。



卯年史談

ほそ だ りゅう ぜん
細田隆善

(東京・江東区勢至院住職
俳号・豊明)

昭和六十二年は干支が丁卯ちのうの年であり、十二支に配して卯年、兎の年といえます。卯は方角では東を指し、時刻では明け六つといい午前六時のこと、また午前五時から午前七時までの二時間をいいます。星座の兎座は冬、南の空に現れ宵のうちから見えます。四月を卯月というのは旧暦四月の頃、卯の花が咲きその花群らが兎のようにやさしく見えるからです。卯は門を

左右に開いた形から出来た文字で、春になって万象が地を開いて生ずる意味を持っています。兎は兎が本字、兎のしゃがんだ形から出来た象形文字で「ム」は兎の尻尾であって点の有無によって全く意味が異なります。日本語のウサギはヲサギともいうが、語源は「ウ」です。それに同意のサギが加わり、サギは印度サンスクリット語のササカ(兎の意)の転じた語ともい

露にふすうの毛のいかにしをるらん

月のかつらの影をたのみて

定家卿

歌人斎藤茂吉の兎の歌を思い浮かべます。

上ノ山の町朝くれば銃に打たれし

白き兎はつるされてあり

斎藤茂吉

昭和九年一月二十三日、故郷上山（山形県）の弟高橋四郎兵衛宅へ赴いたとき、上ノ山入首の歌を作り、その一首です。前年の十一月、茂吉の妻の不倫私行のことが新聞記事に大きく発表され、茂吉生涯最大の衝撃となり、両親も兄夫婦も亡くなった故郷へ行って弟に前後策を相談しました。茂吉の怒りを現すかに吹雪が続きました。銃はマスコミのこと、白き兎は妻のことでしょう。つぎの歌にもやはり茂吉の悲しみがうかがえます。

二十年つれそひたりしわが妻を

忘れむとして衛ちまたに行くも

斎藤茂吉

兎の郷土玩具は少なく、高柴（福島県）の玉兎、浜松

の兎車、那珂港（茨城県）の兎、いずれも張り子の兎として知られています。土製の玉乗り兎は五箇荘（滋賀県）の郷土玩具として昔から知られています。

付記——カットは、国宝「天寿国繡帳」（六二二年、部分）、奈良中宮寺蔵。

「好評」

竹中 信常著

『宗教的体験と人格』

A5判 上製函人 三九五ページ
定価 九五〇〇円

</

《特別寄稿》

『浄土』誌と啄木研究のこと

須^す藤^{どう}隆^{りゅう}仙^{せん}

(函館市称名寺住職
北海道史研究会主宰)

過般、『宗教人石川啄木』という本を、みやま書房(札幌市中央区南八条西十一丁目)から出版いたしましたところ、大変な反響があり、石川啄木という文人の偉大さを、改めて認識させられました。

この本は、実は、以前、『浄土』誌に掲載した小論が基になったものでありまして、以後、『中外日報』紙上等にそれを補足したものを発表し、さらに肉付けして、一書としたものであります。

それですから、いわばこの本は、『浄土』誌から生まれたもの、といっても過言ではないのであります。

周知のように啄木は、岩手県の曹洞禅の寺の息子として生まれました。わずか二十七歳で若死にしましたが、その半生を寺で暮しました。

私は早くから、寺に生まれた啄木は、その文学の中

み仏とともに

—22—

—父の念仏信仰とその挫折(1)—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

昭和三十年八月十五日、父は七十歳の生涯を閉じて、極楽浄土に往生して行った。それはまさに、自からその生命を絶って、進んで極楽に行ったのであった。滋賀のふる里の盆の精霊送りのその夕刻のことであった。このことについては、すでに前に書いた。

一体、父は何故にこうした道を選んだのであろうか。また、果して父はそれで満足して死んでいったのであるうか。最早や、この世にいない父からは、何も聞くことはできない。そして今は、ただそれについて、私なりに推測するだけである。しかし私は、父は父なりな信念を以て、喜んで弥陀の浄土に行ったのだと確信している。父の生涯や、私との対話を思い出すにつけ、そう私は信じている。そして、そう確信するに至るには、それなりなわけがある。それを、あと三回の記述の中で、あとづけておきたい。

だいたい、この記録を書き出したそもそもの理由は、私を今日あらしめた父母のことをしたため、その鴻恩を謝すると共に、その信仰生活をたどることにあった。さして書き出してみると、あれもこれもと話が飛び、私の歩んだ記録のようになってしまったが、いよいよこの稿を

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙七〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年十二月二十五日 印刷

昭和六十二年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇二 振替東京八―八二一八七番

新年賀謹

總本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 善導寺

法主 金子貫達

大本山 金戒光明寺

法主 稻岡覚順

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巢鴨二―二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三一―代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一―一二四―代表
通信教育部 四九一―〇二三九

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭
学長

〒174 東京都板橋区前野町五―三一―七

京都文教短期大学

学長大橋俊有

〒611 宇治市鎮島町八〇